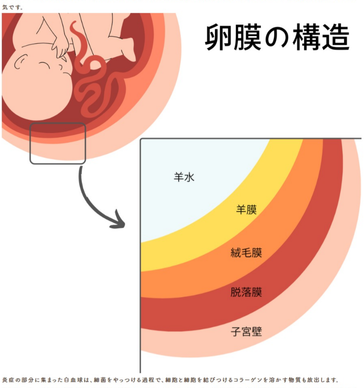
お母さんのトラブル

切迫早産などを含めると、妊娠・出産による合併症は全妊産婦の50%以上に発生すると言われています。
それだけ多くのトラブルが起こりやすい、妊娠・出産。
ここでは重篤化すると危険なお母さんに起こるトラブルを紹介します。

絨毛膜羊膜炎（CAM）

どんな病気？

赤ちゃんを包んでいる卵膜は、3層構造になっています。内側から①羊膜②絨毛膜③基底脱落膜となっています。
絨毛膜・羊膜とは、卵膜の内側（赤ちゃん側）の2層にあたり、絨毛膜羊膜炎は、そこに細菌やウイルスが感染して、炎症がおこる病気です。



炎症の部分に集まった白血球は、細菌をやっつける過程で、細胞と細胞を結びつけるコラーゲンを溶かす物質も放出します。
その影響で、子宮の入り口が軟化したり（子宮頸管熟化）、卵膜が弱まって一部が破れる破水が起きたり、子宮の収縮が引き起こされることがあります。
このため、絨毛膜羊膜炎は早産の大きな原因といわれています。

絨毛膜羊膜炎は、お母さんに症状が出ることもありますが、無症状のこともあります。
どちらかというと絨毛膜羊膜炎はお母さん側ではなく、赤ちゃんのお腹の中での感染だととらえるほうがわかりやすいです。
赤ちゃんや、赤ちゃんがいるエリア（子宮やへその緒）に感染の影響が及んだために、赤ちゃんが「苦しい」と「苦しい」とサインを送る。
そのサインが妊娠さんの発熱や腹痛になる――そんなイメージです。

どんな症状？

絨毛膜羊膜炎は、感染が進んで妊婦さんに症状が出ている状態の「顕性」と、その手前で、まだ自覚症状がない状態の「不顕性」とに分類されます。
顕性の場合には、38℃以上の高熱、脈の増加（毎分100回以上）、下腹部の痛みや圧痛（押したときの痛み）、おりものの異臭などが現れてきます。

- 38℃以上の発熱
- 心拍数が増える（毎分100回以上）
- 下腹部の痛み、圧痛（お腹を押すと痛む）
- おりものなどの異臭

一方で、不顕性の場合、妊婦さん自身には症状はほぼありません。
絨毛膜炎として「熱いお腹の張りを感じた」と話す方もいるようですが、いつもと変わらない程度なら受診を考えるほどではなく、誰にでも出る症状でもないようです。

診断

絨毛膜羊膜炎の診断は、発熱や脈の速さの確認、血液検査による白血球数の確認などでなされます。
最終的な診断は分娩後の胎盤を調べることでなされますが、分娩前は臨床的な診断基準が用いられています。

臨床的な診断基準

①38℃以上の発熱がある場合、以下の4項目のうち1項目以上を認める

②発熱がない場合、以下の4項目全てを認める

- 母体の頻脈（≧100回/分）
- 膣分泌物や羊水の悪臭
- 母体の白血球数（WBC）≧15,000/μｌ
- 子宮の圧痛

Lencki,1994年

下記のような「早産マーカー」とされる物質の検査や膣内pHの確認も診断基準には含まれますが、診断までの検査内容は、大学病院などの大きな病院とクリニックでは異なる場合もあります。

次のような基準で診断されることもあります

- **顆粒球エラスターゼの上昇**
  白血球の一種である好中球から放出される酵素で、細菌を破壊・殺菌する働きをします
- **癌胎児性フィブロネクチンの上昇**
  卵膜の損傷や脆弱化がある場合に、子宮頸管の分泌物中に検出されます
- **膣内ｐＨ＞4.5**
  膣内のpHは通常3.8～4.5の弱酸性に保たれています

どんな治療をするの？

不顕性で見つけられた場合、大切なのは顕性への進行を防ぐことです。
妊娠を続けられるよう、感染の広がりを抑える抗菌薬、早産を防止する子宮収縮抑制薬などの投与を行います。
症状が進んでいる場合には、早産そのものは避けることが難しいため、赤ちゃんの苦ち炎症を為ながら一人ひとりに合わせた対応をします。

実は、出産を遅らせることは必ずしも正解ではありません。場合によっては、すぐに出産するほうが赤ちゃんにとって安全と判断される場合もあります。
その判断のカギは、感染の重症度と赤ちゃんの肺の苦ち炎合です。
妊娠中期の終わりから後期（妊娠26週以降）なら、お腹の外に出ても生きていけるくらいに肺が育っていると判断して「妊娠を終了させる」、つまり分娩が選択される可能性があります。

しかし、それより前の場合は肺が未熟と考えられることから、なるべく長くお腹の中に留まってもらえるよう治療を進めることが多いようです。
治療には抗菌薬や、赤ちゃんの肺を成長させる副腎皮質ステロイドなどが使われます。

予防するためには？

絨毛膜羊膜炎は、症状がないうちに見つけて治療につなげたい病気です。
妊婦健診は大切な機会ですので、ぜひ確実に受けるようにしてください。
なるべくストレスをためず、しっかり食べて、睡眠をとり、健康的な生活をして、免疫力を落とさないことをふがけるのも大切です。

膣内の細菌が異常に繁殖し（細菌性膣症）、それが身体の奥に向かって感染を広げることで絨毛膜羊膜炎に至るケースもよくあります。
おりものの増加、においの変化、かゆみなどを自覚したら、医師に相談しましょう。
ほかにも、歯周病も絨毛膜羊膜炎に関わるといわれますので、お口のトラブルも放置しないことをおすすめします。

妊娠高血圧症候群 PIH
HELLP症候群
子癇
常位胎盤早期剥離
過強陣痛
急緩出血
産科ショック
頸管無力症
帝王切開後の血栓塞栓症
羊水塞栓症
絨毛膜羊膜炎 CAM:chorioamnionitis

Copyright © SANKAIRITO LABO